

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00999

研究課題名(和文) 新出・菩薩半跏像および金石文の分析による古代日本・朝鮮の弥勒信仰の研究

研究課題名(英文) A Study of Maitreya Worship in Ancient Japan and Korea by Analyzing Newly Discovered Maitreya Bodhisattva Statues and Inscriptions

研究代表者

山崎 雅稔 (YAMASAKI, MASATOSHI)

國學院大學・文学部・准教授

研究者番号：40459392

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：6～7世紀に朝鮮半島や日本で製作された仏像に、右足を左膝上へのせ、右手指先を頬に添えて思惟する菩薩半跏像(半跏思惟像)がある。本研究では、その像容と弥勒信仰の関係を明らかにするために、(1)『日本書紀』や『三国遺事』など文献資料にみえる弥勒仏・弥勒信仰関係記事の考察、(2)古代朝鮮の金石文(仏教関係資料)の調査・判読、(3)国内外の所在する菩薩半跏像の作例の調査・研究を行った。その像容は、釈迦の若かりし頃(悉達太子)の姿を表現したものとも考えられているが、本研究の成果を通して、当初から弥勒菩薩として造像された可能性が高いとの結論が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

6～7世紀に日本・朝鮮で造像された菩薩半跏像(半跏思惟像)は、従来、弥勒菩薩を表現したものとされてきた。しかし、中国に両者を結びつける作例がないことから、近年では両地域の作例もまた弥勒菩薩を表現したものではないと考えられている。本研究では海外所在の作例の調査を糸口にして、仏像の像容のみならず、文献史料や尊像に刻まれた銘文などの分析をとおして、その妥当性を検討し、旧説のように弥勒菩薩の造像表現である作例を見出した。日本・朝鮮の仏教彫刻は、中国の影響を多分に受けて発達するが、本研究の成果によれば、両地域においてはその一方で独自の造像活動・信仰形態が展開したことを示唆する。

研究成果の概要(英文)： From the 6th to the 7th century, Buddhist statues with the right foot on the left knee and the right hand on the cheek in meditation (bodhisattva half-lotus statues) were widely produced in Korea and Japan. In this study, I used the following three methods to examine the relationship between this group of Buddha images and Maitreya worship. (1) To examine the articles related to Maitreya Buddha in Historical materials, (2) Investigation of ancient Korean inscriptions (Buddhist-related materials), (3) Research and investigation of examples of Bodhisattva half-lotus statues in Japan and abroad.

As a result, it is thought that the Bodhisattva half-lotus statue is a representation of the Buddha in his early days (Siddhartha), but it was concluded that the statue was created as a Maitreya Bodhisattva from the beginning.

研究分野：日本古代史

キーワード：菩薩半跏像 弥勒信仰 弥勒菩薩 朝鮮半島 金石文

1. 研究開始当初の背景

(1) **仏教美術史研究の成果** 6～7世紀にかけて日本や朝鮮でつくられた菩薩半跏像(半跏思惟像)については、長らく弥勒菩薩の姿を表現したものと考えられてきた。しかし、中国に同様の作例がないことから、同時期に盛行した弥勒信仰とは無関係であり、その像容も弥勒菩薩の図像的表現ではないとする美術史学の成果にもとづく見方が近年有力になりつつある。

(2) **作例の調査** また、本研究の実施に先立ち、研究代表者は日本や韓国で紹介例のないポルトガル国立美術館所蔵の銅造菩薩半跏像について新たな知見を獲得すべく調査を進めてきた。これをきっかけにして、売立目録などのデータベースなどを手がかりに19世紀後半以降海外に流出した菩薩半跏像の作例について関心を向け、その流出の経緯や像容の特質を検討してきた。

2. 研究の目的

本研究では、上記(1)にかかる学説の検証を第一の目的とした。菩薩半跏像が弥勒菩薩ではないとする見方は、たしかに1つの重要な研究成果である。しかし、その妥当性については史資料の精密な検討を行い、総合的な見地から評価していく必要がある。

この課題意識にもとづいて、本研究では、6～7世紀の日本・朝鮮における菩薩半跏像の造像、弥勒信仰の展開を歴史的に探究するために、以下のような3つの具体的な研究課題を設定した。

- (1) 古代日本・朝鮮の仏教関連の金石文(造像記や仏像光背・台座に刻まれた銘文など)の整理検討をおこなう。先行研究の整理をふまえて、新しく公開された写真資料・データベースにもとづいて判読および資料の評価を進める。
- (2) 文献資料にみる弥勒信仰の調査研究をおこなう。『日本書紀』や『三国遺事』をはじめとする史料にのこる弥勒信仰の特質を析出する。
- (3) 国内外にのこる菩薩半跏像の整理・調査をおこなう。海外の美術館が所蔵する仏像について情報(所在、像容・流出の経緯など)の収集を進めるとともに、現地にのこる磨崖仏などの調査をおこない、菩薩半跏像の造像意義の解明を進める。

3. 研究の方法

上記2-(1)～(3)の課題に沿って研究を遂行するために、大学院生を研究活動補助員として雇用しつつ、(1)にかかるデータ入力作業をおこなうとともに、研究会を組織して金石文の判読結果および現代語訳の検討作業会を定期的開催した。また、(3)についても同様に作業を推進し、菩薩半跏像の所蔵先・像容・材質・推定製作年代・製作地など情報を収集してデータベースを作成し、現地調査をおこなう。各年度のおもな研究活動は、以下のとおりである。

(1) 1年目の研究活動 2019年

1年目は、日本・韓国の菩薩半跏像に関するデータベースの作成作業、日本・韓国・欧米にのこる菩薩半跏像の像容・弥勒信仰・金石文に関する調査、ポルトガル国立古典美術館所蔵の銅造菩薩半跏像に関する調査研究を計画した。

このうち、では、両国のほか欧米各国・中国の博物館等に所蔵される仏像について情報を収集し、関連する研究論文や修復・売立に関する情報の収集も進めた。に関連して、仏像等に関連して刻まれた銘文や石刻資料のデータ入力に着手し、一部判読作業をおこなったほか、奈良県において関連調査を実施して、古代・中世の弥勒信仰の展開、菩薩半跏像の造像・像容について新しい知見を得た。については、所蔵先の学芸員に連絡をとり関連情報の提供を受けた。

(2) 2年目の研究活動 2020年

2年目は、前年度に進めてきた菩薩半跏像に関するデータベースの整理を継続し、データの補完作業を進めた。また、『日本書紀』敏達紀にみえる6世紀後半における日本(倭)の弥勒信仰の受容について研究を実施し、これに関連して、韓国で発見されている菩薩半跏像や仏碑、および弥勒信仰に関する金石文の研究をおこなうとともに、ヨーロッパの美術品関係オンラインデータベースを利用して19世紀後半から20世紀前半の売立目録、日本の売立目録データベース、韓国で刊行されている日本植民地時代の売立目録を調査して、海外に流出した菩薩半跏像に関する情報収集に努めた。一方で、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、海外調査を取りやめざるを得なかった。

(3) 3年目の研究活動 2021年

3年目は、前年度に続き、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、予定していたデータベースの作成作業にかかる研究活動補助員が確保できないなど、研究活動に支障をきたしたが、6～9世紀の朝鮮半島における弥勒信仰の展開、菩薩半跏像の造像等に関する金石文・文献資料を中心に史資料の整理を進めるとともに、韓国で公表されている関連論文を収集して、既存の成果

の把握に努めた。また、植民地時代に朝鮮総督府下で行われた史蹟調査や考古美術展覧会に関する報告文、および同時代の盗掘等に関する新聞記事を網羅的に収集した韓国語図書資料を入手し、これを手がかりにして、韓国慶尚南道地方における石造弥勒菩薩倚像の発見当時の状況などが分かる報告書・写真資料を探し出して分析を行った。

(4) 4年目の研究活動 2022年

4年目は、所期の研究実施計画にもとづいて、2度にわたる韓国調査を実施した。この調査では、菩薩半跏像をはじめとする仏教彫刻などを実見して、仏像の年代観、制作地の推定作業の参考とすること、朝鮮半島の仏教受容と変容について、現存する資料及び最新の研究成果を通して俯瞰することをめざし、本研究のもう1つの目的である仏教関係の古代金石文の調査・情報収集を進めた。

(5) 5年目の研究活動 2023年

新型コロナウイルス感染症の影響により、当初予定していた研究・調査を実施できなかったため、研究期間の延長を申請した。その5年目は、古代仏教関係金石文のデータの入力作業、および当該データの判読文・現代語訳の検討作業、国内・海外所在の菩薩半跏像にかんするデータベースの再整理、国内・海外における調査の実施、国際学術交流会を開催し、研究成果の公開に努めた。

4. 研究成果

(1) 新出菩薩半跏像の調査および課題の明確化

これまで日本で紹介されてこなかったポルトガル国立古典美術館所蔵の銅造菩薩半跏像に注目し、その像容分析と製作地・海外流出経緯の調査をおこなった。その結果、美術館への寄贈者が本像を入手した経緯、元の所有者の日本との関係までを明らかにすることができた。具体的には以下の知見と課題を獲得した。

獲得した知見 本像は、かつてジョルジュ・エンシエルのコレクションの1つであり、その没後、1919年にパリのジョルジュ・プティ邸で執り行われたコレクションの売買において、カールスト・グルベンキアンに買得され、第二次世界大戦の勃発を機にパリからリスボンに移住したグルベンキアンが晩年に国立古典美術館に寄贈した。1919年の売立目録には、銅造菩薩半跏像の写真・解説が付されており、日本の関西地方で製作された天平様式の“Miroku”(弥勒)と紹介されている。菩薩半跏像を弥勒仏とみるのは、19世紀後半から20世紀前半の認識であろうが、少なくとも上記の点から本像が日本から持ち出されたことが了解される。また、ジョルジュ・エンシエルは、迎賓館赤坂離宮の内装・外装に関わった人物であり、同館の設計者片山東熊らとも接触していたとみられる。しかし、彼が本像を入手した経緯までは突き止められなかった。

課題 他方、本像は、頭頂部から足指まで全身にわたって修復の痕跡が多数ある。補修痕は粗さが目立ち、台座も後補と考えられることから、古代仏ではない可能性をのこしている。そのため、本像の成分分析のほか、海外に流出したその他の仏像の保存・修復方法の把握に努めるなどして、本像の製作時期・製作地の究明が進められなければならない。また、本像の像高は、約110cmであり、広隆寺蔵菩薩半跏像、韓国国立中央博物館蔵菩薩半跏像と同等の規格で、等身仏として製作されている。古代仏であったとするならば、はたしてどこから流出したものか、さらなる追究が必要である。

(2) 菩薩半跏像と弥勒信仰の関係性の解明と課題の明確化

6・7世紀を中心に日本・朝鮮半島で製作された菩薩半跏像の尊格について、文献資料や仏像や仏碑に刻まれた銘文について調査し、菩薩半跏像(半跏思惟像)が弥勒菩薩として製作された複数の事例が認められることを明らかにした。具体的には以下の知見を獲得した。

『日本書紀』敏達紀や『元興寺縁起』にみえる百濟より伝来した弥勒石像は、後世の史料から片足を踏み下げた半跏像であった可能性が高い。台座框に「弥勒」の銘を刻んだ野中寺(大阪)の菩薩半跏像が7世紀後半に弥勒の尊像として製作されたとするならば、少ない事例ではあるが、日本では弥勒信仰を背景に菩薩半跏像が製作された可能性を排除できない。また、蓮華寺(韓国世宗市)所蔵の「戊寅銘仏碑像」は、前面に阿弥陀仏、背面に菩薩半跏像を配置する。別造の台座に刻まれた銘文は不鮮明であり、調査時に判読できなかったが、後者は「弥勒」菩薩と考えられる。「断石山神仙寺磨崖仏群」(韓国慶州)に弥勒如来立像とともに浮き彫りされた菩薩半跏像も弥勒菩薩とみてよい。このほか、「永康7年銘金銅光背」(平壤市出土)・「中原鳳凰里磨崖仏像群」(忠清北道)などの作例・銘文より、菩薩半跏像が弥勒信仰を背景にして造像されたとみられる。これらは多くを先行研究の成果に依拠するが、『三国遺事』に散見する弥勒信仰のありよう(興輪寺塑像弥勒三尊、百濟弥勒寺の建立、溟州蟹嶺の石弥勒、生義寺の石弥勒)や三花嶺弥勒如来倚像(慶州)国立清州博物館所蔵の仏碑にみえる菩薩半跏像の検討を通して、

百済・新羅における弥勒信仰の特質として、弥勒の修行する兜率天への往生を願う上生信仰、悟りを得て地上に降りた弥勒による救済を願う下生信仰を背景とした造像とともに、祖先・父母など死者の追善供養を目的とした造像活動がおこなわれたことが明らかになった。

本研究では上記のような事例を確認した。しかし、弥勒菩薩の図像的表現と判断できない菩薩半跏像の作例もある。朝鮮半島諸国の文化的影響を受けて日本の菩薩半跏像の造像行為、弥勒信仰が展開したとして、中国の菩薩半跏像・弥勒信仰との接続について実証的な考察を進めることはできなかった。これらは今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 山崎雅稔	4. 巻 第121巻第11号
2. 論文標題 敏達紀の「弥勒石像」と朝鮮三国の弥勒信仰	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 157,173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山崎雅稔	4. 巻 242号
2. 論文標題 国史学	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 新羅海印寺妙吉祥塔誌群の釈読	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 山崎雅稔
2. 発表標題 ジョルジュ・エンシエルの日本コレクション
3. 学会等名 ルーヴェン大学・國學院大学国際学術交流プログラム（第1回）（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 第1回 ルーヴェン大学・國學院大学国際学術交流プログラム	開催年 2023年～2023年
--	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------